

仙台陣屋かわら版

第八十号

(平成二十三年十月号)

HP: <http://www.town.shiraoi.hokkaido.jp/ka/jinya/> Mail: jinya@town.shiraoi.jp

〒059-0911 白老町陣屋町六八一 TEL&FAX 0144-852666 仙台藩白老元陣屋資料館発行

埋蔵文化財を町内小中学校で展示します

皆さん、白老町に縄文時代の遺跡があったのはご存知ですか？ 縄文時代初め頃の遺跡としては虎杖浜に複数ありますが、縄文時代終わり頃の遺跡は町内で一例しか発見されていません。それは、東北部を中心に発達した亀ヶ岡文化の影響がある社台一遺跡です。本州では縄文から弥生、道内では縄文から続縄文へとといった時代区分が有名ですが、亀ヶ岡文化はその両方の地域にまたがって独特の文化圏を形成しているのです。この文化圏の影響を受けている社台一遺跡では多くのお墓が発見されており、土器や玉の他、紅ベンガラと呼ばれる赤色の塗料が塗られた土器が七例出てきています。



〈発見されたコハクの玉〉

そんな遺跡を少しでも多くの子どもたちに知ってもらえればと考え、町内の小中学校で社台一遺跡の巡回展を始めました。この機会に、子どもたちには教科書の情報だけでなく、本当の「モノ」というものを見てもらい、「百聞は一見に如かず」を体感してもらえればと思います。

道内でも珍しい遺物をお披露目していますので、保護者の方々も是非ご覧になってください。十月末までの各校の日程は次の通りですが、各校への展示・撤去作業は夕方に行なわれます。

○竹浦中学校

九月二十二日(木)～二十九日(木)

○萩野中学校

九月三十日(金)～十月七日(金)

○虎杖中学校

十月七日(金)～十四日(金)

○白老中学校

十月十四日(金)～二十一日(金)

○白老小学校

十月二十一日(金)～二十八日(金)

アイヌ文化フェスティバル開催決定

アイヌ文化フェスティバルの開催日が十月十六日(日)に決定し、今年も陣屋資料館では展示会を企画しています。仙台



〈昨年の展示会のようすです〉

あきつ 市秋保町から「湯元の田植踊保存会」「ユネスコ無形文化遺産登録の方々」が来町するほか、アイヌ文化を題材とした子どもミュージカルなど、今年も盛り沢山の内容となっております。

陣屋資料館の企画では、森竹竹市と知里幸恵について展示することになりました。あまり認識されていないことですが、この二人、実はほぼ同じ時期に生まれ育っています。二人が社会へアイヌ民族について発信していた著述や原稿の内容は、今なお私たちに大きな問題を投げかけています。私たちはこれらを透かして、二人のたぐいまれ

なる文学的才能に、あるいは両者が実感した差別の姿に触れることができました。

しかし一方ではそうした言論活動が、まるで当時のアイヌ民族の総意のように捉えられてしまうこともあります。私たちが見ているのは、極めて断片的な事例であることを再認識するためにも、展示会ではほとんど同じ時代に生まれ育った二人のアイヌの遺稿から、二人がそれぞれに感じていた社会観やアイヌ民族への想いを考えてみたいと思います。

資料は森竹竹市研究会ならびに昨年開催した登別の銀のしずく記念館から拝借し、展示スペースはコミセン正面玄関を入って右側の教育課窓口前です。沢山の方のお越しをお待ちしています。

平成二十三年度資料館特別展開幕

七月十六日(土)より開催しておりました特別展「荒波を越えてく備えと支え」展が、八月二十一日(日)をもって無事閉幕しました。期間中の来館者はのべ一五〇〇名以上と、大盛況な展示会となりました。

全国を見渡しても有数の難所である津軽海峡。蝦夷地への渡海において避けては通れない交通の要所に焦点をあてた特別展でしたが、皆さんいかがでしたでしょうか。現在であればフェリーや飛行機、列車で簡単に渡海できますが、昔は命を賭けた大問

題だったといふことを、企画した我々も改めて痛感しました。当時の人々が積み重ねた危険を減らす地図などの実測による「備え」と、神仙へ祈った絵馬や御守「支え」、これら両者が揃ってはじめて、難所として名高い海峡の荒波も越えることができていたのです。今回の特別展に際し、貴重な資料を快くお貸しくくださった寺社や諸機関、講演会講師を務めてくださった佐藤宏一氏、そして暑いなか足を運んでくださった皆さん、本当にありがとうございます。

余市町で学芸員の研修会「おもてなしの心」を学ぶことができました

博物館を訪れた人々に心から満足していただくためには、いつでも必要なときに対応できることが大切です。ところが人手不足の施設では、職員がその本来的な役割を果たせないことも珍しくありません。いまや名実ともに施設の案内役を担うボランティア団体ですが、実は多くの課題も抱えて



いるのです。

今回、余市町で行なわれた北海道博物館協会の研修会では、「来館者をもてなすとはどういうこと」か、道内各地から集まった学芸員が議論を交わしました。特に講演会では、「博物館は町の顔」であることも強調されています。来館された人によっては、自分のペースで見たい方や、あまり構っては欲しくない方もいらっしゃいます。「説明したい」という熱意のあまりに、かえって気分を損ねてしまったりはもったいないですよ。説明が上手いことは大切。しかし上手なだけでも、「おもてなし」はできないということなのです。

議題に挙ったもう一つは、解説員の高齢化と次世代人員の確保についてです。この施設でも、やはり担い手は退職者や子育てを終えられてから加入した方が中心となっています。多くの協力者に支えられている博物館施設ですが、人員の維持と世代交代を円滑に行なっていくための努力も必要なのです。

陣屋資料館でも、友の会会員を募集しています。北海道史のなかでも特徴的にして重要な陣屋史を、共に学び、共に伝えてみませんか? ご連絡をお待ちしています。

「仙台陣屋かわら版 第八十号(平成二十三年十月号)」

発行日: 平成二十三年九月二十二日(木)

発行所: 仙台藩白老元陣屋資料館 担当者: 平野・干場